

ロツク・ハンド・スクール

— 英語でのつまずき —

佐々木甚一（新11回生）

記憶とは不思議なものである。良い思い出は残っていないのに、嫌な記憶はしっかりと残っている。脳の中でどのようなからくりがあり、悪い記憶だけが残ってしまったのか。

当時、岩手中学では英語教育に力をいれていた。中学三年で高校一年のレベルの授業をしていたと思う。その中学に田舎の小学校を終えて汽車で通う事になった。田舎の小学校

では試験はほとんどなく、毎日、健康的な生活をしていたので、中学に入ってから定期試験には驚いた。どのような勉強をすればいいのか分からないままテストを受けたが、案の定、赤点だらけであった。そして補講のために夏休みを返上して勤勉に通学した。今にして思えば賞状ものである。

しかし、英語には興味があつた。小学校では習わない教科だったからかもしれない。教

科書は「Jack and Betty」であった。「ジャック・アンド・ベティ」は、私たちの年代にとつては何物にも替えがたい青春そのものの代名詞である。

人は知識を蓄えれば、それを披瀝したくなるのが世の常である。ある日、日頃の英語の勉強の成果を見せようと白い肩掛のカバンに「Rock Hand School」と大きく墨書した。

つまり「岩手中学」の英語訳である。それが当時の私の英語のレベルであった。そのカバンを背負い、翌日から得意満面に通学した。古き良き時代だったかも知れない。誰も笑う者もいなかったし、はたまた注意する者もいなかった。と言うより呆れていたと解すべきだろう。その後そのカバンをどうしたのか、とんと記憶にない。

高校三年でまた似たような出来事があった。木造校舎のグラウンド側の一階に、階段教室があった。そこで大学進学のための補講をやっ

ていた。やはり英語の授業であった。先生の「音楽家を英語でなんと言うか」の設問に、私はとっさに答えてしまった。「Music man」と。当然、先生にたしなめられた。「それは、Musicianだろう」と。もつともである。人は窮するとなにを言い出すか分からないが、私はその傾向が特に強い。

二〇年ほど前に、米国のNIHに研究のために行った。娘は現地の小学校に編入した。学校生活に慣れてきた頃の話である。

学校から帰って来た娘は、「今日、学校でおもしろいことがあった。友達が英語のテキストを先生に読ませられたが、その男の子は「Heを読めないで、テ・ハ・エと読んでしまった」と。英語を話す国においてさえてある。分からないことは分からないのである。「ロック・ハンド・スクール」と大差はないと思つた。

こうして振り返ってみるに、教育は動機付

けであると思う。何に関心をもたせるか、何に関心を持つか、それが教育であるのかも知れない。関心を持たせれば放置しておいても一人で勉強する。

岩手高校を卒業して四〇年になんなんとしているが、母校を思う気持ちには変わりはない。弘前に二五年ほど住んでいるが、春になれば、弘前大学合格者を見るのがたのしみである。

岩手県からどの程度弘前大に合格したのか、また母校の卒業生がいるのかを見る。残念ながら母校出身者はほとんどいない。寂しい限りである。後輩の一層の奮起を期待している。そのためには先生方の努力も必要であるかも知れない。

外国の研究者はよく「Burning discussion」と言う。来世紀に向かう母校を思うとき、正に生徒、先生そして父兄を含めた燃えるようなディスカッションが必要なのかも知れない。